

スワヤンブー寺院模型

企画展「模型で世界旅行」出展作品 製作/マンダキニ・シュレスタ、盛口正昭(2002年) 幅19.5cm 奥行28.3cm 高さ19cm

南 真木人

民族社会研究部



カトマンズに暮らす人びとが信仰してやまないスワヤンブー寺院。それが三〇〇分の一に縮小した模型になって、わたしの両手の平の上にいる。神仏にたいして申し訳ない気もするが、こうして見ると、何と端正で美しい寺院だろう。模型には「モンキー・テンブル」の愛称どおり、サルまでいる。

ネパールの寺といえは、儀礼に

こんなじつくり「スワヤンブー」を見るのは、初めてのような気がする。

スワヤンブーは正確にはストゥーパ(ブツダの遺骨を納めた仏塔)ではなく、チャイテイヤ(礼拝対象としての祠堂)であり、向かって右の塔がプラタツプル寺、左のそれがアナンタプル寺である。建立の年代は明らかでないが、一一世紀の史料にはその存在が

記されている。

カトマンズ盆地が湖だったころ、文殊菩薩がその一角を刀で断ち切り、湖水が流れ出た大地に最初に現れたのが、スワヤンブー(自ら生じた)神仏なのだ。もっ

使う水、赤い粉、花びら、精製バター、ところによっては供養した動物の血や、群がる鳩の糞でじめじめしていて、どうしても足もとやズボンの裾を気にしながらうつぶき加減に歩いてしまう。頭を上げれば今度は、みやげ物売りこむ人や日本語で話しかけてくる人などに付きまといわれる。それはそれで旅のリアリティだし醍醐味でもあるが、思えば

ともヒンドゥー教徒のなかには、これをシヴァ神の創造力の象徴であるリング(男性性器)として祀る人もいようだ。多様な神仏が「マンダラ」をなすといわれるカトマンズ盆地にあって、ひときわ高くてめだつスワヤンブーは、より聖性をおびた空間なのだ。神の目で、とは畏れ多くていえないが、鳥になったつもりでご覧

いただきたい。